

II 実践

＜実践例 1＞ 第1学年 平成29年12月

(大 隅 一 浩)

1. 主題名 「よりよい社会をつくる」 内容項目 C－(12)

2. 資料名 「遊園地のできごと」

3. 主題設定の理由と資料の概要

本学級の生徒は、学級討議などの話し合いの場面において提案者の提案を前向きに受け止め実践しようとする姿が見られる。道徳「大企業を相手に内部告発すべきか」においては、大部分が「悪いことは悪い」と判断し「内部告発する」という選択をしていた。また、道徳「きみならどうする？」において、相手の立場を想像して本当に困っている人は誰なのか悩む姿が見られた。しかし、学年討議でリーダー性を高めようという話し合いには賛成しても、いざ「誰がリーダーをするか」という場面になるとなかなかリーダーが現れない。よりよい環境や状況をつくるためには、自分も当事者の一人だという自覚を持ち、自分の考えを主張しながら互いの考えを調整し、よりよい結論を導こうとする態度を身に付けていく必要がある。

本資料は、内容項目 C－(12)「社会参画の意識と社会連帯の自覚を高め、公共の精神をもってよりよい社会の実現に努めること」をねらいとしている。人間には誰しも幸福を追求する権利があるが、多くの人間が集まれば全ての人の幸福を十分に実現できない場面が生じる。実際の社会においては、互いの主張がぶつかり合うと、「言ったもの勝ち」になる場合や、「黙って我慢する」という場合が見られがちである。公共の場では自分もよりよい社会をつくる一員だという自覚を持ち、みんなが満足できるよう行動を調整していくことや、ルールやマナーの必要性とそれらを守ることの大切さに気付くことが求められる。

こうした態度を養うために、指導において特に重視した資質・能力は、「考えた解決策が、関係者や場面・状況を配慮したうえで最善のものであるかを検討し、納得解を求めていく力」である。中心発問の「みんなが笑顔でショーを終えるためには、誰が何をすればよいか」を考える際には、自分の主張をひかえたり我慢したりしている解決策に対して、「本当にそれでいいのか」「自分がその立場なら受け入れられるのか」を問いかけていく。よりよい公共の場をつくるためにそれぞれが譲歩し合うことや、どのようなルールをつくり守っていくかなどについて考えさせていきたい。

資料について

本時で用いる資料は、遊園地のショーを楽しみにして見に来た「わたし」の目の前で、子どもを肩車する男の人や無理矢理割り込んでくる女の人などが現れてトラブルが起こり、気持ちが晴れないままショーを見終えるという内容である。誰もが「ショーを楽しみたい」という思いでいるはずなのに、それぞれが自分の権利のみを主張しようとするあまり、みんながショーを楽しめない状況になってしまう。この状況を解決するために誰がどのような行動をとればよいかを考えることを通して、公共の場においては、自分の行動が周りに対してどのような影響を与えうるのか考えなければならないことや、ルールを守ることはもちろんマナーを守ることも大切であることなどに気付くことができる資料である。

4. 授業の実際

1. 目標

様々な立場から行動の理由や影響を考察し、みんなが楽しめる環境をどのようにつくり出すかを考えることを通して、よりよい公共の場をつくる当事者の一人としての自覚を持ち行動しようとする態度を育てる。

2. 過程

学習活動【学習形態】	◇発問 ◆中心発問 △指示・説明	○教師の手立て
1. ショーの写真を見る。 【全体】	△ショーを楽しむために必要なことは何ですか。 ・早く場所をとる。・ショーの人と一緒に歌ったり手拍子したりする。	○立場に注目させるために、楽しむのが「誰」なのかを問いかける。
2. 資料を範読する。 【全体】	△資料を読みます。	
3. ショーが楽しく見られなくなった状況をとらえる。 【全体】	◇ショーが楽しく見られなくなった状況は誰のどんな行動によって生まれたのでしょうか。 ・男の人が肩車をした。・女の人が割り込んだ。・若い男が怒鳴った。	○状況を単純化し、立場を明確にするために、「肩車をした男の人」「女の人」「若い男」の3つの立場に絞って考えさせる。
4. 3つの立場から、行動の理由と影響を考える。 【個】	△ワークシートを配付する。 ◇あなたが一番共感できるのは誰ですか。 ・男の人：小さな子どもを優先すべきだし、ルール違反もしていない。 ◇あなたが一番迷惑をかけていると感じるのは誰ですか。 ・男の人：子どものことだけ考えて、後ろへの影響を考えていない。	○それぞれの立場の心情に寄り添わせるために、「自分がその立場なら」と問いかける。 ○それぞれの立場の行動を客観的にとらえさせるために、「周りにはどう映っているのか」と問いかける。
5. みんなが笑顔でショーを終えるためには、どうすればよいか考える。 【班】	◆みんなが笑顔でショーを終えるためには、誰が何をすればよいでしょう。 ・男の人が肩車をしない。 ・若い男は優しく指摘する。 ・肩車や割り込みを禁止する。 →みんながいるところでは、少し我慢する必要がある。	○みんな「ショーを楽しむ」ために行動していることに気付かせるために、なぜそれぞれが「お客様」と言ったのかを考えさせる。 ○当事者意識を持たせるため、「それでいいの?」「あなたならできる?」と問い返す。
6. 本時を振り返る。 【個】	△本時の中で自分が考えたことを書きましょう。	○ねらう姿に近付いた振り返りだけでなく、多様な考えを発表させる。

3. 評価とその方法

よりよい公共の場をつくる当事者の一人としての自覚を持ち、行動しようとしているかを、活動5の話し合いや活動6の記述内容に、周りを意識した行動やルールとマナーの必要性などに気付いている様子が見られるかどうかで評価する。

5. 生徒の振り返り

- ・改めて相手も大事、自分も大事ということがどれだけ難しいかが分かってよかったです。
- ・周りの思っていることを代表して注意することは正しいことだと思うのですが、言い方がきついところや、大声を出してしまったところがあったと思うので、優しく注意するなど全員が楽しく過ごせればいいなと思いました。
- ・どうしても人間は自分が楽しむために周りへ気を配ることができなくなってしまうことが多い。だけど、そのような場合こそ冷静になれるといいと思う。これからの生活では、常に周りを見て生活していきたいと思う。
- ・プールに行ったとき、規則で「走らない」というのがあり注意されたのを思い出しました。走ると自分もケガをするし、他の人にも迷惑をかけるから。
- ・最初はみんなが気持ちよくいるのは無理だと思いました。でも、話し合いをしてみても誰にでもやれることはあったことが分かり、「私」などのように「肩車した男の人」「女の人」「若い男」以外の人にもやれることはあったなと思いました。
- ・マナーは他人のことを考えて自分がやりたいことを我慢するという部分もあるので、ショーを見る人全員がどうすべきかを考えるのがよいなと思いました。

6. 授業を終えて ー考察ー

実践を通しての成果(○)と課題(▲)は以下の通りである。

- 立場を明確に設定し、「共感できるのは誰か」「迷惑に感じるのは誰か」をそれぞれ考えさせることで、中心発問に対して多角的に考える姿や様々な立場を踏まえたうえでよりよい解決策を提案しようとする姿が見られた。意見を発表する場面では、理想論的な解決策に対して現実的な実現の難しさを挙げて反論する場面もあり、納得解を出すことの難しさを実感する様子が見られた。
- 資料の内容のような状況を経験した生徒もおり、自分の経験と重ね合わせて捉える姿が見られた。授業と自分の経験を通して、改めてルールの必要性やマナーを守ることの大切さを実感した生徒が多く見られた。さらに、自分事として考えを深めさせるために、それぞれの立場をロールプレイで演じて主張し合うなどの手立ても考えられる。
- ▲中心発問に対する話し合いを通して、解決の見通しを見出し合ったり合意形成を図ろうとしたりする姿はあまり見られなかった。中心発問の「みんなが笑顔でショーを終える」の「笑顔」とはどの程度の満足度を指しているのかなど、条件設定や生徒間での共通理解が必要であった。
- ▲本資料では、ルールやマナーを守ることの大切さ、公共の場において自分の振る舞いが相手にどう見えているかを自覚することなどに気付かせることはできた。しかし、ルールやマナーは絶対的なものとしてどこかにあるものだと感じている生徒が多く、ルールやマナーはみんなで作るものであることや自分もルールやマナーをつくる一員であることの自覚は低かった。「社会参画」の意識を培うためには、より効果的な資料を探していく必要がある。

